

MACFは3月8日の礼拝から3月末までお茶の水クリスチャンセンターでの礼拝を休止しています。4月からは再開したいと願っています。それまでは、ぜひ、Youtubeで礼拝をささげてください。

祝福がありますように。 関根一夫

+++

MACF礼拝説教要旨

2020.03.08

【パウロの思い】

ローマの信徒への手紙 1章

1:7 神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

1:8 まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。

1:9 わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証してくださいることですが、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、

1:10 何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。

1:11 あなたがたにぜひ会いたいのは、“靈”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。

1:12 あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです。

+++

1) あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。

パウロはまだローマの信徒たちとの面識はないのですが、それでも彼らがローマ帝国の社会の底辺に生活し、苦労しながらもイエスさまを信頼し、生き生きと社会の中で生きていることを知らされました。

パウロはそこでまず最初に「あなたがた一同についてわたしの神に感謝します」と伝えています。

つまりわたしはあなた方の存在を心から神様に「感謝」していますというのです。「神様、あの人たちのこと、いてくれてありがとうございます」という感じでしょうか。

「存在を感謝される」ということほど心の温かくなる出来事はないと思います。

パウロは心から、それを伝えているのです。

2) 直接関わりをもちたい

1:10 何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。

パウロの方から、そちらに行きたいという願いを持っています。

「あなたが来なさい」ではなく、「わたしがそちらにいきます」という態度ですね。

それは、おそらく「受けるより与える」という態度だと思います。

そもそも、福音は「理屈」だけで伝わるべきものではなく、その人と会い、その人と語り、その人の生き方を見ながら、そこに息づくイエス様の香りを感じて信仰が深められるという部分があります。

パウロはそれをよく知っているのです。それはパウロの個人的な出来事でもあったはずです。

パウロは彼の回心のあと、アナニアというクリスチヤンと直接出会います。

使徒言行録の記録です。

9:10 ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。

9:11 すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。

9:12 アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」

9:13 しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。

9:14 ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」
9:15 すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。
9:16 わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」
9:17 そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになります。また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」
9:18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、
9:19 食事をして元気を取り戻した。サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、
9:20 すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。

おそらく、これはパウロにとっては衝撃的なことだったと思います。自分が迫害し、捕縛しようとしていたクリスチャンのひとりアナニアが自分のところにやってきて「祝福」してくれるわけですから。パウロは、自分が行って直接話すことができる、直接関わることでできることによるイエス様の香りを分かち合う機会をぜひ持ちたいと思ったにちがいありません。

3) 力になりたい、励まし合いたい

パウロは教師であり、優れた指導者でした。ですから、“靈”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。ということについて、パウロほど頼もしく、有能な人はいなかったと思います。しかし、パウロはそういう言葉を語った後に、「あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです。」と語っています。

新改訳聖書では

「1:11 私があなたがたに会いたいと切に望むの

は、御靈の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。

1:12 というよりも、あなたがたの間にいて、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。」

4) 教会とは

パウロのこの姿勢は、教会における私たちの姿勢でもあつたらなあと思います。生き生きとしたキリストの香りと優しさを分かち合うために、説明や説得は必要ですが生き様として「相手の存在を神に感謝し」「自分のほうから出かけていくことを厭わず」「力になってあげようという意識よりもむしろ、互いに励まし合いたい」という意識で礼拝を継続することができたらきっと、そこには魅力的なイエスさまを愛する集団ができるのだろうと思います。パウロの短い挨拶の文章から、あなたは何を感じとることができますか？祝福がありますように。